

# 下野新聞

## とちぎの在宅医療

3

医療の役割は、医療を用いて病気やけがを治し、命を救うことだと考えているのではないのでしょうか。ところが、患者さんの多くは、血圧やコレステロール、糖尿病などの生活習慣病で、食習慣や運動習慣、喫煙や飲酒など生活習慣が原因だとされています。特に症状



太田秀樹医師

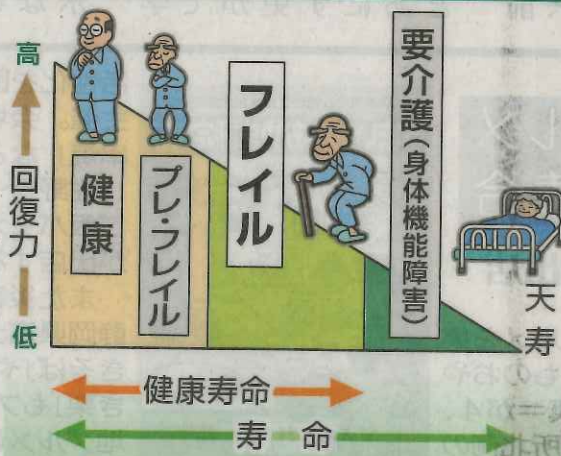
はありせんから、日常生活に支障ありません。心筋梗塞や脳梗塞など命に関わる重篤な病気を予防し、健康寿命を延ばすことが治療の目的なのです。「治す」というより、臨床検査値を物差しとして管理しているのです。

### 避けられない虚弱化

年を重ねると虚弱化を避けることができません。足腰が弱り、わずかな段差で転倒しやすくなります。いつの間にか食が細くなり、体重が減り、筋肉も弱ります。物忘れがひどくなるかもしれません。このような病態を最近「フレイル」、「サルコペニア」と呼ぶようになりました。

「フレイル」は弱ったという意味ですが、はかなく、むなししいという負のイメージを払拭するため、日本老年医学会があえて英語で

フレイルのイメージ図



出典:東京大 高齢社会総合研究機構・飯島勝矢(太田改編)

## 上手な付き合い方必要に

提唱しました。「サルコペニア」は筋肉が痩せて、力が弱くなるというギリシヤ語由来の医学用語です。こ

れらの高齢者特有の病態は根本的に治すことが難しく、上手に付き合っていくねばなりません。高齢者の増加によって、病気の概念も変わってしまったのです。救命して、1分1秒長寿を目指し、発展した医学によってもたらされた超高齢社会は、「フレイル」や「サルコペニア」と対峙する医療を求め始めています。治すだけではありません。尊厳ある暮らしを支える医療が必要なのです。そして今、望むところで、自分らしく天寿を全うするために、在宅医療への期待は一層大きなものとなっているのです。

(医療法人アスムス理事 長・太田秀樹) (毎週金曜日掲載)